「哲学研究」の思い出

「哲学研究」の恩を思う

植田壽蔵

「哲学研究」が五百号に達した。これは大きい事実である。この事実の前に、私は今ふかく頭を垂れる。「大江日夜流」という句を読んだことがある。今もまたこの言葉を思い起こして、ほのかに眼底に浮び渡る光景の前にたたずんだ。大江日夜に流る。河を語ってこれほど大きく語り得た言葉も少いと思うが、「哲学研究」の今日までの歴史を語るにも、これほどふさわしい言葉は少いと思う。

大正五年に創刊せられて、今日までまさに五十年。五十年と云えば、ただそれだけでも感慨を誘うほどの長い年月であるが、その五十年がまた実に容易ならぬ年月であった。長い困難な時代をとおして、草創以来の精神と、それを遂行する方法を失わず、変移は単にその精神を守成するためのみにとどめて、静平にして確乎たる進行を続けて来た。輩出する有為な学者たちが、項背相望み、心力を尽くして論文を書き、つぎつぎに編集を担当する委員諸君が適正に編集し、年を追い号を重ねて、企画を乱さず、凝滞せず、ひたすらに我が国の哲学の高壮な学風を形成しつつ、その行程を進めて来た。まことに大江日夜に流れて、五百号への流路を大成したのである。これは学界の偉業ではないか。比べ得るものはどこにあるかと思わしめるほどの功業ではないか。

この大江の流水の水に五十年、私も一葉の扁舟の影を浮べて来た。創刊から三年ほどは私が編集の命を受けた。その後は年一度もしくは二度、ささやかな結果を、編集の諸君を煩わして収録せられる栄を得た。私は最初から、このような大きい学問の場に立ち入ることに、何にもまさる生甲斐を覚えて来た。もちろん今もそのとおりである。現職にいて、職務の種々の面のために、多くの努力と時間が要請せられる間もそうであった。ただ力弱く、思うほどにその願いを達し得ざる恨みが深かったのである。私は時に編集の諸君に云った。「哲学研究」の原稿を依頼せられるには、遠慮せられることなどは、少しもないでしょう。勉強の一つの機会が提供せられるのです。昔、ハイデルベルグに数日足をとどめた一日、ネツカア河畔の道を上流へ向って歩いていた。一緒に歩いていた人がふと、私が編集を去った時、一群の――私が時々原稿を頼んだ――若い諸君が、これで幾らか息がつけると話し合ったと私に云った。私は諸君にそういう思いをさしていたことを始めて知って、愕然としたが、しかしまた気を取り直して、それも諸君にわるいばかりではなかったのではないかと、ひそかに思った。

昭和二十一年の七月に、私は時が来て文学部を去った。それ以後は私に残っている小研究を続けることと、それを書きとめることとのために、なにかの職業への勧誘を固く辞した。以後二十年。僅かな収穫の一部は十数年前に創刊せられた「美学」によって大半は「哲学研究」によって、さいわいに学界の一顧

を乞うことができたのである。

これは私には大きい恩であった。少年の日の頃から、私はひたすら学問と、その結果としての著述に夢を掛けて来た。生活のための学問をではなく、学問のための生活をもつことを願い続けて来た。この夢をもち、それを実現するために、今日のような生活をもつ私にとっては、「哲学研究」は私の生甲斐の大半を支えて呉れる耕地であった。私の感謝は云い尽すべき言葉も知らないほどである。

この恩により、この二十年に私が学界の一顧を乞わんとしたものは、三四の論文のほか、すべて私が美術の根源と考える「視覚」の意味の追求にとどまった。すでに四十年前にも、それについての多少の考察を試みたこともある問題を、やや精密に考えてみたに過ぎない。まことに狭小な視野に籠居して、徒らに自己の性癖を追うことのみに急であったのかも知れない。ただ私にはこれが私の八十年の生涯の最後に近づいてようやく捉え得た果実であった。遠い背後から人間を見まもる或ものの前に——それを学問の良心とも論理とも呼ぶことができないであろうか——ともかくこれを差し出してみようと思うのである。

「哲学研究」は光栄に輝く、記念せらるべき五百号を迎えた。光栄に輝く記念号は、今後もしばしば、種々の機会に迎えられるであろう。しかし私の謝恩の辞は、おそらくこれが最後のものであろう。

「哲学研究」の初めの頃

山内得立

「哲学研究」が創刊されたのはたしか大正五年であったかと思う。誌名を何とするかについて大分議論があり、西田先生などは「哲学論叢」がよかろうという説であったが、論叢というのは定期刊行物には相応しいが月刊では重くるしいようであり、遂に「研究」と決定した。その頃この語が流行していたせいもあるが、雑誌の性質上研究が主となるべきであり、教授の諸論文は勿論巻頭を飾るが、それよりも新進の若い人々の研究論文が世に出るような舞台を作ることが主なる目的であった。このことは今でも此の雑誌の特色であり、又はあるべきであるが五十年の歳月の間には幾多の曲折もあった。創刊号には西田先生の「現代の哲学」が載せられ、かなりな長篇である上に、現代哲学の特色が鮮かに描出せられ、よくまとまった上に潑剌たる意気込みがあって人々を瞠目せしめたものである。金沢から京都に移り（暫く東京に居られたが）先生の学殖も遽かに増大して、孤独な思索家から博大な教授に、一挙にして生長された観がある。他人の思想を紹介するにもやはり自分に何ものかがなければ出来ないものだということが先生によって示された。先生ほど読書に際してその核心を掴むことに於いて敏なる人は少ないかもしれない。実に恐ろしい直観力である。現代の

哲学（主としてドイツ哲学であるが）に於いてカント学派の外に、現象学派があることを、そしてそれが如何いう立場であり、何を現代にもたらすかを明らかにせられたのは西田教授を以て嚆矢とする。ボルツァーノやフッサールの名をききそれについて何ほどか知ったのも先生によってであった。私自身について言っても現象学に対して心ひかれ、その研究を初めるようになったのも、この論文とその前後に行なわれた、京大に於ける先生の特殊講義によってである。先生は現象学派に対して余り同感をもっていられなかったようであり、後年日本の優秀な哲学々徒がこぞってフライブルグ大学に集まったのを見て「フッサールの学問は鬼面人を驚かすものだ」などと評言されたが、恐らく此派の人々の煩瑣な分析が先生の性格にあわなかったためであろう。

いつか「先生も一度外国へこられたら如何ですか」とドイツから私が書信すると「若き日、人、我を顧みず、今は既に老いたり」というきびしい返書があった。そういう先生は未だ五十前後の年で今ならとても老人の部に属しない年頃であった。先生は長く不遇の人であったように世間では思われているが京大の教授になられたのは四十一、二の頃であって今の教授達と比べて決して遅くはなかった筈である。あの頃一世を風靡した大家も皆々若かった。上田敏博士や深田康算先生の死なれたのも五十前後であったろう。

哲学研究の創刊は西田哲学にとっても一転期をなしたものといってよい。「善の研究」の出来た頃先生の思想の背景となったのは主として英米の心理学であり（このことは最近全集刊行のため当時の遺稿を探索することによって益々明らかになった）スタウトやゼームス等の書が頻りに読まれたようであるが、何といってもドイツ哲学の本格的な研究が初まったのは京都に来られた後であっただろう。カント学派に対しても頗る批判的であったが、これと対決することによって先生の独自の思想も著しく客観的となり学問的となったことは争われない。大著「自覚に於ける直観と反省」は尽く「研究」に掲載せられ我国の哲学界に万丈の気焔をはいたものである。「哲学研究」について語るべきであった私が余りにも多く西田先生について記しすぎたようでもあるが、古い思出といえばこれ位のことしかないのであるから仕方がない。

五十年といえば随分長い年月のようでもあるがまたいつのまに過ぎ去ったかと驚くほど短い感じもする。とにかく今日まで「哲学研究」が存続し得たことは当然のようでもあるが又大変めずらしいことのようにも感じられる。永遠――哲学者の最も好む――とまではいかなくともなるべく長くこの雑誌の刊行が続くことを祈ってやまぬのは私一人ではないであろう。

回　想

下村寅太郎

回想を求められて逡巡の想ひがある。未だそんな境遇にゐな

いといふ含羞でもあり自負でもある。しかし何時の間にか回想を徴される境遇になってゐたことは事実である。愕然或は慄然の気分がある。未だ将来の可能性に期待をもってゐるのは未だ精神の成熟を意識しないからでもあらう。しかし学問的関心の推移を想ふと辛うじて変化だけは否定できない。

京都に生れて、歳四十歳にして初めて故郷を離れた。中学と高等学校と大学は、南北に街路を距てゝ連ってゐたから、一区切り毎に北に延びて同じ路を十年以上通った。自分の成長の緩慢さを象徴するかの如くでもある。東京に移り住んで、京都の師友から切り離されて、大都会の中に孤りを感じたが、同時に解放をも感じた。しかし京都を離れて初めて京都の空気の密度を感じた。京都に居た時は茫々漠然と暮してゐたやうであったが、東京の空気を吸って初めて鍛練されてゐたことを感じるやうになった。東京へ出てくると直ぐさま色々な会合に呼び出された。そこで遭ふ人々はすべて他流の未識の人々のみである。始めの間は緊張感があった。――地方から出て来たといふひけ目よりは中心から来たといふ私かな稚い誇りをもって。しかしフランクに迎へられた。実際に人々はフランクだった。京都の学問に対する畏敬のやうなものが感じられた。改めて師友に対する感謝の念を懐いた。同時に虎衣を着けた痩馬の感じに苦しんだ。京大哲学出身者は東京で華々しい存在であった。それは必ずしも華々しい人々が出京してゐたからといふだけではなく、京都での修練が自由に解放、発揮されたのだと思へた。恐らく京都にあっては必ずしも可能ではなかったであらう。このことは同時に京都の気分の重々しさを改めて思はしめた。――巨峯の谷間にゐたが、此処は平原である、と。大都会の広濶と寛容を感じた。「開いた」気分を感じた。しかし同時に、東京には京都に於けるやうな密度の濃い結びつきが人々の間にないやうに感じられた。何処にも中心がない。学問的密度の稀薄さを感じたのはそのためかもしれない。京都では先生たちが厳然たる中心であった。東京にはそのやうなものが存在しないやうであった。人々は師について談ることは稀れであった。人々は分布散在してゐる。自由ではあるが散漫である。このことは同時に京都の閉じた気分を追想せしめた。しかしそれが沈潜に向はせたともいへる。交流も狭くて極めて制限があった。変化は師友の学問の展開のみであった。これなくば京都の気分には停滞しかなかったであらう。しかし師友の学問の進展はすばらしかった。壮観であった。そのため京都にゐる間、少しも停滞を意識しなかった。寧ろそれに追随することに努力を要した。東京に移ってから、それが重圧であったことを想ふやうになった。同時に東京の生活の危険をも感じた。

今、東京にあって京都の空を想ふと、徒らに静かなやうに感じる。出京して来る華やかな存在も稀れになった。京都は閉ざされた世界となったのではないか、と感じる。何ら聞えてくるものがないからではあるが、しかし聞えるべきものがないのではないことを信じる。

「一国の興るや一人にして」、云々の言葉があったが、我々の

学問に関してはこの念特に切である。

今となっては、我々の学生時代は、京都の哲学科の「黄金時代」であったといってもよいであらう。既に伝説的にすらなってゐる。西田先生、次いで田辺先生の講義には、在京、近郊の新旧の卒業生――既に教壇に立ってゐる人々も、期せずして聴講に集って来た。哲学科の先生たちも学生に伍して聴講された。大きな教室には渾然として阿吽の呼吸の合する気分が漲ってゐた。教官室では（多分）先生たちの間で、卒業生たちは駿進堂で、その日の講義をめぐって論議を続けた。あの頃の情景は色々な人々によって既に記されてゐるが、今日ではLegende.の如くなってゐる。――《Mais ou sont les neiges d'autan?》

編輯回思

三村　勉

四百号の特輯はなほこの間のことのやうに思ひおこされるのに、『哲学研究』は間もなく五百号に達するといふ。歳月を繰れば、既に十五年を経てゐる。月刊を建前とする『哲学研究』にとって遅きに失するとも早くはないはずであるが、あれから百冊の刊行といふ事実は、感慨なしには容易に実感とはなりえなかった。之は或は、しばらくでも『哲学研究』編輯のおてつだひをしたといふ特殊な事情にもよることであらうか。

記憶は不可疑と思はしめる鮮明さを以てしばしば誤ち、感想はそれの述べられる時点にとかく支配される。良識にしたがって語られるべき物事の範囲は且又さほど広くはない。編輯の思ひ出を求められて、とまどはざるを得なかった私は、四百号特輯の折に、関係の諸先生に当然のこととして回想記をお願ひしたことを思ひおこして、僅に心を決めることができた。『哲学研究』に属することは、私のこととして忘却の流れにゆだねられるべきではないであらう。

編輯の実務に当るやうにとの委員会の御意向を承ったのは昭和廿五年初夏の候、薔薇の咲き匂ふ季節のことのやうに記憶する。昭和廿四年から新学制が発足して、文学部の不完全講座にも助手の配属があり、その当時私は哲学教室の助手であった。教室の主任教授山内得立先生から、「助手の仕事だと思って承引するやうに」とのお話をつゝしんで承って、二、三年来編輯の主宰を担当してゐられた美学・美術史教室の井島勉教授の研究室におうかがひしたのではなかったかと思ふ。如何に重大な学会の責務を負ふことになるかを深く省みるいとまもなく、事は決したのであった。それからまる五年、小田武氏の後をうけて、昭和卅年のやはり薔薇の初花の匂ふ季節に酒井修君にその事務をひきついでもらふまで、井島教授の下に編輯のお手伝をしたことになるが、それは所謂戦後十年の後半分に当る期間で、身近かには旧学制と新学制との実質的な切換の時期であり、内外ともに多事、『哲学研究』の編輯もまたその圏外に立つことはできなかった。編輯の実務遂行の微力に苦しみながら、伝統をくづさずに何とか三十年代に及びえたとすれば、そ

れは偏にやはり伝統の力によるものであったと云ふほかはない。普段は無関心とも見える委員の諸先生あるひは哲学科出身の諸先生も何かといふことになると不思議に力になって下さった。そして私は、『哲学研究』が昔のまゝの純学術誌の形をたもって、入退会の自由な会員制度による月刊を建前として、発行されてゆくことを当りまへのことのやうに思ひこんでその実務に当り、しばしば遅刊になやまされながら、最後までこの気持には疑念をいだかなかった。この不思議なオプチミズムは私だけのことではなかったのではないかと思ふ。今にして思へば、私の役割は、たとへてみれば、時にまどろまうとする大魚の尻尾を噛んで眠りをさます程度のことであったであらう。由緒ある雑誌が各所で姿を消しあるひは実質を変へていったこの時期に、学問の世界の単純な道を基本的には何等のためらひもなく歩みえた『哲学研究』のエネルギーは、やはり特異な伝統から由来するものであったと思ふよりほかないやうに私には思はれるのである。

形質両面に亙って従来の型を堅持することが一貫した建前であったが、多少の変容は、或は積極的に必要と考へられ、或は消極的に止むを得ぬこととして認容せざるを得なかった。

先づ雑誌の体裁についていへば、三九四号（第三四巻の第一冊、廿五年八月発行）から、従来白紙であった表紙Ⅳに、表紙Ⅰに相応する外国語による雑誌名・会名・内容見出し等を印刷することになった。これは同時にはじめられた外国文による論文要旨の掲載と結びつく一聯の構想の下に企劃されたもので、その構想とは「世界的視野の下に」といふことであったと思ふ。この際、雑誌交換などの便宜も考へられたが、それ等は単なる附帯条件にすぎない。英語で一応統一されたのは、特定の外国語のなかで英語が比較的無難に世界語的な役割を代行しうるものと考へられたによる。論文要旨まで英文で統一することについては、発足の当時から問題があったが、それについては又あとで触れることにしよう。ともかく、雑誌の衣装のいはば後姿を決めることなので慎重を要した。之については、学会名ならびに雑誌名の公式の外国語名称の問題から、活字の配置・その大きさと種類等のことにいたるまで、基督教学の有賀鉄太郎教授に一方ならぬ御配慮を煩した。研究室以外に御自宅にも何度かおうかゞひした。見本刷も四、五回に亙ってとりよせ、そのつど委員の方々の御意見も個別的に徴して修正していったので、委員会提出の原案は無修正で決定されたやうに思ふ。要は、簡素かつ風格あるものをと云ふことであった。之に平行して、表紙Ⅰの横書きの部分は従来の右書きから左書きに改められた。内容見出しの縦書きを左からはじめるわけにもゆかず、之を横書きにすることも望ましくないので、この場合様式上の不統一が生じること、及び特に表紙Ⅰに関しては従来の様式はできるだけ保存すべき性質のものであること、この二点を如何に処理すべきかが考慮されたが、横書きの部分については活字の配置を逆にすること、他は一切変更を加へない、といふことで話は決まった。

次に編輯上のことについてみれば、外国語による論文要旨

は、先にのべたやうに一応英文に統一して出発することになった。之は本来的には執筆者の自由な選択に俟つべき性質のものと考へられたが、『哲学研究』の責任において掲載されるものとしては、外国の側からみて、その国の語法に自然なものであるべきことが要求され、そのためには委員会から校閲の担当者を各国語について決めていただかなければならない。それぞれに堪能な方がゐられたわけであるから、敢て断行すれば之は不可能のこととは思へなかったが、結局、中世哲学史の高田三郎教授と有賀教授にしか御承引がえられず、一応英文で出発することになった。そして論文の性質や連絡の便宜などもあって、いつとはなしにその殆どを高田教授にみていたゞくやうになってしまひ、この点、私にも責めがあるので、この機会に深く先生に謝せねばならない。執筆者には英文要旨のほかに邦文の要旨を添へていたゞいたが、要旨とは元来充分な理解に達するに困難な性質のものであり、而も之を理解した上でなければ語法の最終的な修正はできない。しばしば渋られながら、そして殆どの場合お願ひした期日には間にあはせていただけなかったが、結局最後までこの労多くして且つ良心的に苦痛の残る仕事をして下さったことを今更ながらしみじみと回想する。そして私は安んじて英文要旨を『哲学研究』に載せることができた。そしてこの安心感が私をして最後まで英文による要旨に執着せしめ、ひいては執筆の方々の表現の自由を拘束することになった。酒井君に仕事が引継がれて最初になされたことは、この論文要旨の表現の自由化ではなかったかと思ふ。私は之を見て、何か安堵の思ひをしたのである。

執筆者の簡単な紹介を附記することも三九四号からはじめられた。何か事大的な見方も可能なので、之も一決といふわけにはゆかなかったが、『哲学研究』の規模は既に全国的であり、且つ執筆者も必ずしも著名人に限らず、『哲学研究』掲載の水準に達するとみられる限り可及的に新進気鋭の諸君の論文をも発表する建前のものであってみれば、執筆者紹介はやはり親切な措置であらうといふことで、之は落着したかに思ふ。

編輯に当って、最も心を砕かねばならなかったことは、できるだけ従来のしきたりに従って、できるだけすぐれた論文を、できるだけ多く発表することでなければならなかったことは当然のことであった。掲載論文の質のことについては、私がここで触れるべきことではないが、その数については最後までその意図を達成しえなかったことをお詫びしなければならない。従来のしきたりもまた、実情に副って或るていど変容されざるを得なかった。

最も苦しんだことは発行の遅延であった。三九三号（第三三巻の第一二冊、廿五年七月発行）から三九八号（第三四巻の第五冊、廿五年十二月発行）までの足どりは極めて順調であった。そして私は之を常態と思ひこんでゐた。そこで、四〇〇号記念の総目次の準備に当って、廿一年以来の冊と発行月とのくひちがひが気になってゐたので、第三四巻は第五冊で打切り、第三五巻から冊と発行月との序数を一致させて四〇〇号を祝ふとともに月刊誌としての姿勢を正して出発したいと私は考へ、

委員会に申出てその承認を得た。ところが四〇〇号（第三五巻の第二冊、廿六年二月発行）の発行以来、どうしても次の号が印刷してもらへない。何度も弘文堂の印刷所に足をはこんで時には激しく詰問したが、問題は直接の当事者間の処理の次元をこえたところにあった。井島先生並びに会計の実務を担当してゐられた美学美術史教室の上野照夫先生の御力添へによって、漸く四〇一号が定価を七〇円（従前は四五円）に改めて日の目を見たのは六月も末のことであった。然しおそらくこの程度の値上では問題の充分な解決にはならなかったのであらう。それ以来発行は不定期となり、そしてこの状態は廿九年末に定価一〇〇円に改められるまでつゞいたやうに思ふ。私はどこまでも月刊の建前を確信してゐたから、しばしば二冊分の原稿を持ちこんで遅刊を責めた。弘文堂での『哲学研究』の係であった鈴鹿幸保氏は常に笑顔を忘れず、紳士的に対応せられたが、それが却って私には腹立たしく思はれる時もあった。『哲学研究』と弘文堂との間に立ってどのように苦慮されたかを今は亡き鈴鹿氏から直接承る機会は永久に失はれたが、今にして思へば、それは並大抵のことではなかったであらう。謹んで氏の労を謝せねばならないと思ふ。

編輯の建前には従来から行はれて来た型があった。それは、たとへば心理学や社会学などを包括した広いいみでの哲学の論文のなかから狭義の専門をことにする論文を二、三篇づつとりあはせるとともに、論文の水準の組合せを適当に配慮して編輯するといふことであった。いつもこのことを心に刻んで編輯に当ったが、さまざまな専門の学会誌等の誕生の事情もからんで、とかく論文は狭いいみでの哲学に偏りがちになることを防ぎえなかった。また発行回数が実質的に減少したこと（五年間の年平均発行数は七冊弱）が大きく影響して原稿の総量においては常に過大を背負い、如何にして早く之を消化するかに心を痛めながら、委員の先生方や学外の諸先生の論文のいただき難さを嘆じるといふ裏腹な現象になやまざるを得なかった。委員の方々は年に一篇（最初は時評、書評等は数に入れず）は原稿を下さる約束になってゐたが、之は仲々に実行していただけなかった。けっきょく私の編輯の全期間を通して、約束の通り、而も期日をたがへず原稿を毎年下さったのは（廿八年に御退官後も）山内先生だけであった。編輯等に関しては殆ど一切何事も申されなかったが、深く責任を感じて見守ってゐられたことを今にして思ふ次第である。然し之は他の方々がなげやりであったといふことではない。なかには、私が研究室などにおうかゞひすると、私が何も申し出ぬ前にその意を察して原稿の弁明をされる場合などしばしばあった。気に懸けてゐられたのである。そして殆どの場合、どうしても困るといふことになると、何とか御都合いただけた。試みに私の編輯期間の『哲学研究』をしらべてみると、内外甚だ多事であったあの時期に、殆どの方が三篇ないし二篇の原稿を下さってゐた。私の労は充分に酬はれてゐたのである。学外の諸先生についても同じやうなことが考へられるやうに思ふ。なかでも、植田寿蔵、高坂正顕、沢瀉久敬の諸先生の御厚情は忘れ難い。そしてなほ昨日のことの

やうに思ひうかべられるのは、『哲学研究』は手習草紙だと教へられた朝永三十郎先生の御微笑である。学問の道はどこまでも手習ひの道であらう。私たちはそのやうな手習ひの草紙として『哲学研究』をうけついだ倖せを私たちの時代だけのものに終はらしめてはならないであらう。私は編輯でやりきれないやうな気持のときにはいつもそのやうに思って来た。そしてそれは又、委員の方々をはじめとする諸先生の共通したお気持ではなかったであらうか。

私の編輯期間を通じて、『哲学研究』は表紙を除き普通号六十頁といふことになってをり、この限度を守ることについては、井島先生からも御注意あり、鈴鹿氏は特に気を配ってをられたやうであったから、私も厳格に考へて処理しなければならなかった。書評や彙報、論文要旨、更には廿九年からはじめられた外国雑誌論文一覧などを之から差しひくと、時には論文のためのスペースは五十頁を切ることもあって、之は甚だ窮屈な框であった。四百字詰五、六十枚の論文は原則的には一回で完載することを期したが、之すらも時に二つに割って載せねばならなかった。そしてこの原則を優先せしめると、長篇のものは細切れのやうに短く切られ、何回にも亙って連載されるといふ甚だ望ましくない結果が避けがたかった。加ふるに発表の機会はできるだけ多くの人に分たれるべきことが望まれた。編輯担当の当初にかなりの数の長篇の論文を引ついだことは、原稿を用意するに不慣れなものにとってまことに好都合なことではあったが、又このやうな当惑の種ともなった。思ひきって、一論文四百字詰五十枚までといふ原則を委員会でたててていたゞいたのは、廿六年からのことではなかったかと思ふ。思想関係の純学術誌として之は甚だ不本意な措置であったから、一面之をどこまでも形式的な目安としてのみうけとり、実際の処理は良識的になされねばならぬといふ気持がはじめからあったのであるが、同時に又、やはり一律公平に処理すべきであるといふ反面の反省もあって、いはば自縄自縛の両難の気持に最後まで纏綿された。時に未完結の原稿を載せてしまってから、それが意外に長くつゞくといふやうなこともあって、このやうな場合の気持は特に複雑であった。

一つ一つの論文の表題をみてゆくと、今まで全く忘却のなかにあったやうなことまでが、一つ一つの論文にまつはる特殊な記憶として不思議にはっきりと思ひだされて来る。そしてそれを核として、そのフリンジは次第にひろがり、そして相互にからみあひつゝ、思ひがけぬことまで記憶のなかによびさまして来る。然し求められた原稿の規定枚数を大分こえた今は、終りに急がねばならぬ。編輯・校正の実務は、はじめは殆ど私ひとりの仕事であったが、後には大学院の諸君にいろいろと手伝っていただいた。特に酒井君と門脇卓爾君の労には記して謝意を表したい。また、後に乞ふて委員に加はっていただいた教養部の石田仁先生の控へ目なお力添へと、いつも私の気のつかぬことを何気なくやって下さった上野先生の御温情とは何か珠玉の光のやうに私の記憶のなかに煌めくのを覚える。終りに記して感謝の心をいたさねばならない。